

## 第4章

# 東近江市の歴史文化の特性

### 1 東近江市の歴史文化の特性

# 1 東近江市の歴史文化の特性

鈴鹿の山々から琵琶湖へと広がる本市では、それぞれの環境に適応した生活文化が形成されてきました。本市で見られる人びとの営みは、旧石器時代にはじまり、長い時間をかけて歴史文化、伝統文化へと昇華し、現代に引き継がれています。

第1章、第2章で見たように、自然環境、社会的状況、歴史の変遷を通して本市を概観したとき、本市の歴史文化は大きく4つの特性を見いだすことができます。

- ◇ 鈴鹿の森と水に育まれた暮らしの文化
- ◇ 街道がもたらしたひと・もの・ことをつなぐ往来の文化
- ◇ 多様で重層的な信仰と豊穰・安寧を願う祈りの文化
- ◇ 時代を拓くものづくりの文化

## 鈴鹿の森と水に育まれた暮らしの文化

本市の56パーセントを占める森は、複雑で多様な生態系を形成し、特別天然記念物のカモシカやイヌワシ、クマタカ等の希少な野生生物をはじめ、多くの動植物を育んできました。

鈴鹿山脈の麓に位置する相谷熊原遺跡からは、縄文時代草創期から晩期にかけての遺構や遺物が見つかり、はるか太古から森の恵みを楽しむ生活を送られていました。また、中世以降、大寺社の造営に森の樹々が伐り出され、木材や薪炭を供給するなど、森の資源を生かした暮らしが展開されてきました。さらに、急峻な斜面や、濃霧、短照、寒暖差といった森の自然環境を利用した茶栽培が行われ、全国でも有数の政所茶の生産が今も行われています。

一方、森で生まれた一滴の雫は河川となり、流域の田畑を潤しながら琵琶湖へと注ぎます。山間部では、山の斜面や谷間の傾斜地に棚田をつくり、谷水や湧水を温めながら稲作に利用しました。また、河川が伏流する扇状地では溜池や野井戸を掘り、水量が豊富な下流域では溝田をつくり、田ソリを使った稲作が行われました。さらに、湖岸周辺では集落の中を水路が張り巡り、舟を使って漁労や農作業へ出かけるなど、水路が重要な役割を担っていました。

このように、森が生み出す恩恵と森から生まれた水を巧みに使いこなす生活文化こそ、本市の歴史文化の特性と言えます。



政所茶摘み



水路を歩きかう田舟（福堂町）

## 街道がもたらしたひと・もの・ことをつなぐ往来の文化

市域には、古代東山道(後の中山道)をはじめ、中世、鈴鹿越えに使われた八風街道や千草街道、近世の御代参街道や朝鮮人街道が走り、絶えず「ひと・もの・こと」が行き交い、政治や経済、文化に大きな影響を与えてきました。

鈴鹿越えに使われた八風街道・千草街道は、近江と伊勢を結ぶ最短ルートとして蓮如上人や山科言継、連歌師宗長等の文化人や、六角義賢や織田信長等の武将も利用しました。特に、朝倉攻めに失敗した織田信長は、美濃への退却時に千草街道を利用しており、軍事的にも重要な街道とされていました。また、朝鮮人街道は関ヶ原の戦いに勝利を収めた徳川家康が上洛に使った道とされ、徳川家の吉道として秀忠や家光も利用し、沿道には将軍休憩施設である伊庭御殿が造営されました。

また、中世には山越え商人によって様々な商品がもたらされ、街道が交差する八日市付近で八の付く日に市が立ったことから、「八日市」と呼ばれるようになったと言われていす。さらに、応仁の乱に際し、京都五山から避難してきた学僧との交流を通して永源寺に都の文化がもたらされ、江戸時代には京の伏見人形の技術が小幡に伝わり、「小幡でこ」の名で全国に知られました。さらに、近世後期には多くの近江商人が輩出し、「諸国産物廻し」や「鋸商い」と呼ばれる商法で京や江戸、松前まで商圏を広げますが、近江商人が活躍できた理由の一つに、いくつもの街道が集中していたことが挙げられます。この地の利を生かし、近代以降も鉄道敷設や高速道路整備が行われています。

古代から続く「ひと・もの・こと」をつなぐ往来の文化は、本市の歴史文化の大きな特性となっています。



御代参街道沿いの道標



小幡人形

## 多様で重層的な信仰と豊穰・安寧を願う祈りの文化

本市の自然は豊かな大地を育みましたが、時に厳しく、人びとの生活を脅かしました。そのような時、人びとがよりどころとしたのが神仏でした。

水利に乏しい愛知川中流域では、8世紀に渡来人が伝えた技術によって灌漑水路が開削され、金貝遺跡で水路に面して社殿が設けられ、人びとはここで水の恵みに感謝し、五穀豊穰の祈りを捧げたと考えられています。一方、水が豊かな五個荘金堂伝統的建造物群保存地区では集落内の水路に「川中地蔵」と呼ばれる自然石が祀られ、地域を潤す水への感謝と畏怖を忘れず、絶えず花が手向けられています。さらに、「たろぼうさん」の名で親しまれる阿賀神社は、源義経が奥羽に向かう際、源氏再興を祈願した神社と伝わり、古来より多くの武将の信仰を集めてきました。

現在は祭神であるまさかあかつかはやひあめのおしほみみのみこと正哉吾勝勝速天押穗耳尊の尊名から、「勝利と幸福を授ける神」として、スポーツ選手や受験生等、多くの人びとが勝利祈願に訪れています。

建部祭に代表される郷祭りや、山から神輿を引きずり下ろし、里から湖まで渡る伊庭祭等、本市の個性豊かな祭礼行事は、信仰と地域の在り方を生き生きと現代に伝えます。神社仏閣やこれらを支える宗教組織として檀信徒や宮座、講等の信仰の組織が重層的に引き継がれ、村落住民を強く結び付けることで、今につながる近江の惣村自治の文化が育まれてきました。多様な信仰と豊饒・安寧を祈る文化こそ本市の歴史文化の特性であると言えます。



赤神山と太郎坊宮



建部祭

## 時代を拓くものづくりの文化

本市では、古くから新しいことにチャレンジする精神が培われてきました。7世紀から8世紀にかけて市域に移り住んだ渡来人は、半島の技術を用い、古琵琶湖層の粘土を使った須恵器を作り、生活を豊かなものにしてきました。10世紀にはこれたか惟喬親王がろくろ轆轤の技術を里人に伝え、木地師の手によって全国に広まり、せんぼん旋盤や回転軸を伴う現代の工業技術へと継承されていったと伝わります。技術者たちが今も蛭谷、君ヶ畑の神社への参拝を絶やさないのは、モノづくりの祖神として惟喬親王を信仰しているからに他なりません。

また、湖東地区のおさむら長村は古くからいもじ鋳物師の里として知られ、江戸時代にはぼんしょう梵鐘づくりの技術を確立し、全国の名立たる寺院の梵鐘がここで生産されました。さらに、近代に入ると蒲生岡本村の堀井父子によって謄写版の技術が改良・発明され、活版印刷以来の革新的大量印刷技術として近代日本を支え、昭和初期まで印刷の主流として全国で利用されました。

このように、本市は、常に新しい物事が生み出され、時代を切り開く最先端のものづくりに取り組んできた地域でした。



謄写版(ガリ版)